

## アフガーニスタンの歴史と現在

井谷 鋼造

### はじめに

新しい世紀の始まりの年であった2001年は、世界で最も豊かで、強力な国家であるアメリカ合州国を舞台とし、世界全体を揺るがす大きな影響をもたらした「同時多発テロ」が発生した年として記憶されることになる。現地時間9月11日午前起こった、航空機を用いた都市中枢部への攻撃の被害は2800名余の死者を出し、繰り返し流された、その衝撃的な映像は全世界の人々の脳裡に焼き付き、アメリカのみならず、世界の全体に計り知れない大きな心理的、物質的な影響を与えた。この「同時多発テロ」への報復としてアメリカ合州国の軍隊は同盟国イギリスの支援なども受けて10月7日からアフガーニスタンへの空爆を開始した。この間の事情は様々なメディアを通じて世界中に情報が流されたので、改めて繰り返す必要もなからう。

アフガーニスタンはそれまでほとんど、世界から「見捨てられた」国であった。アメリカによる攻撃が始まり、アフガーニスタンが世界の注目を浴びるようになるまで、地図上でアフガーニスタンの正確な位置や主要な都市名や、歴史について多少とも知識のある人がどれほどいたであろうか？ またアフガーニスタンそのものについてもどれほどの人が関心を持っていたであろうか？

本稿は2001年10月29日にアジア文化学科の主催で行われた緊急特別講演会「アメリカ同時多発テロと西南アジア情勢」の際に筆者が準備した資料が基になっている。その後何度かの補訂を加えて完成した。アフガーニスタン情勢は現在も時々刻々と変動している。今日書いたことは明日にはもう古くなっている。その意味では「現在」をそっくり書き留めることは不可

能である。ただし、アフガーニスタンが現在のような状況を迎えている歴史的な背景を正確に理解しておくことはアフガーニスタンの今後の情勢を予測したり、把握するためにも必要なことであろう。

筆者は、特にアフガーニスタンの歴史を専門に研究しているわけではないが、現在までアフガーニスタン周辺の中央アジアやイラン、トルコなどイスラーム圏の西アジアの歴史を現地のことばで書かれた文献研究や現地調査を重視しながら研究してきた経歴もあり、とりわけ、30年近く昔になる学生時代以来アフガーニスタンの情勢には格別の関心を抱き続けてきた。昨年来の国際的なアフガーニスタンへの関心の高まりにも対応して、アフガーニスタンの歴史や現状を簡略に紹介する一文を草しておこうと考え、本稿を作成した次第である。

### アフガーニスタン Afghānistān とは？

中央アジアと南アジアをつなぐ位置にあり、西方はイラン、南方と東方はパキスタン、中国、北方は中央アジアのトルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタンと国境を接する内陸国。面積は65.2万平方km。国土の中央部を峻険で長大なヒンドゥークシュ山脈が横切り、この山脈の南北で、民族、言語、文化が大きく異なる。気候は大陸性、高地性、乾燥性で、冬には山岳部にかなりの降雪がある。「アフガーニスタン」とは、もともとペルシア語で「アフガン人のくに」をさす。人口は推定で約2500万人。主要な産業は農業と牧畜で、内戦以前はほぼ食糧を自給していた。「アフガン人」とはパシュトゥーン人 Pashtūn に対するペルシア語の呼び方である。「アフガン人」自身はパシュトゥーンと自称する。パシュトゥーン人はその内部で多くの部族（カウム qawm という。ギルザイ、ムハンマドザイ、ユースフザイ、モフマンドなど）とその下部組織の多数の氏族（ハイル khayl）に別れており、主としてアフガーニスタンの東部と南部に居住する各部族は独立心が強く、政治的に統一されていない。パシュトゥーン人はアフガーニスタンの人口の約4割を占め、インド・ヨーロッパ系のパシュトゥー語 Pashtū を使用し、パキスタン、インドでは、パターン人 Pathān と呼ばれる。アフガーニスタンには、他にトルコ系のウズベク

人 Özbek とトゥルクメン人 Türkmen（それぞれトルコ系のウズベク語とトゥルクメン語を使用する）が、北部と西北部に住み、合わせて人口の約10パーセントを占める。他にイーラーン系のタージク人 Tajik（アフガーニスタンのペルシア語＝ダリー語を使用する、人口の約3割）や、人種的にはモンゴロイドのハザーラ人 Hazāra（ダリー語を使用する、人口の約2割、風貌は日本人に似ている）が居住しており、典型的な多民族国家である。宗教はイスラーム教で、中央部の険しい山岳地帯に住むハザーラ人以外は、スンニー（スンナ派）である。ハザーラ人はイーラーンと同じ12イマーム・シーア派に属する。アフガーニスタンは多言語社会であるが、民族間の共通語としてはダリー語 Fārsī-Darī が優勢である。

### アフガーニスタンの歴史

アフガーニスタンの歴史は古い。現在の国土の東北部にあるバダフシャーン Badakhshān 地方では、ラピスラズリ（瑠璃） lapis-lazuri / lājward という宝石が産出し、古代エジプトやメソポタミアの遺品にもラピスラズリが装飾に用いられている。つまり古代のエジプトやメソポタミアの文明は現在のアフガーニスタン地域とラピスラズリという宝石を通じてつながっていたのである。紀元前2000年紀に、インドに侵入したアールヤー（アーリヤ）人が住みついた土地のひとつが現在のアフガーニスタン地域と考えられる。紀元前4世紀にハカーマニシュ（アカイメネス）朝ペルシア帝国の打倒をめざして東方に遠征した、マケドニアのアレクサンドロス大王がこの地を通過し、その後この地には、ギリシア人の建てたバクトリア王国が栄えた。紀元後2～3世紀に、この地はプルシャプラ（現在のペシャーワル Peshāwar）を都とするクシャーン朝の支配圏に入り、仏教文化が広がった。仏教の原典を求めて7世紀に中国から天竺（インド）に旅した僧侶、玄奘三蔵もこの地を通過した。

10世紀に、現在の首都カーブルの南方にある、ガズナ（ガズニーともいう）の町を首都とする、ガズナ（ガズニー Ghaznī）朝が成立すると、現在のイーラーン、アフガーニスタン、パーキスタン、インド西北部にまたがる地域にイスラーム教徒の支配が始まった。12世紀後半にはアフガーニスター

ン中央部の山岳地帯を本拠としたゴール（ゲール Ghūr）朝が勃興し、インド方面へ盛んに進出した。13世紀にモンゴル帝国を創建したチンギズ・ハンは中央アジアから現在のアフガーニスタンへも侵攻し、インダス河畔に到達した。現在アフガーニスタンにハザーラ人やモゴール人と呼ばれる、人種的に明らかなモンゴロイドの特徴をもった人々が住んでいるのは、チンギズ・ハンの遠征に始まる13－14世紀のモンゴル支配時代に、主として軍事的な理由でこの地に派遣されたモンゴル部族と関連があるのではないかと考えられている。

1483年中央アジアのファルガーナ（現在のウズベキスタン共和国東部の地域）に生まれた、ティームール朝の王子ザヒールッディーン・バーブルは、当時勃興しつつあった、ウズベク族の英傑シャイバーニー・ハンの前に、中央アジアを逐われて、1504年から1526年まで、活動の中心を現在のアフガーニスタンの首都カーブルへと移した。1526年にバーブルは現在のインドの首都デリーの北方で、当時インド西北部を支配していたアフガン系のローディー朝の軍隊を打ち破り、デリーやアグラを占領、インドにムガル帝国を打ち立てる基礎を築いた。ムガル帝国初代の皇帝（バーディシャーフ）になったバーブルの墓所は現在のカーブルにある。アフガーニスタンの北部に多いウズベク人は16世紀の初め、アフガーニスタン地方を支配していたティームール朝政権を打倒して、中央アジアからこの地に進出したウズベク人の末裔やその後新たに移住してきた人々であると考えられる。また、クズル・バシュ **Qizil-bash**（現地では「ケゼル・パーシュ」）とも呼ばれるトゥルクメン系の人々は、17世紀にイーラーンのサファヴィー朝のシャーフ・アッバース1世が東方辺境防衛の目的で駐留させた軍団の末裔である。

アフガン人が歴史上大きな役割を果たし始めるのは、18世紀にイーラーンでサファヴィー朝の勢力が弱体化してからである。1722年カンダハールを本拠とするアフガン人ギルザイ族の首領マフムード **Mahmūd** は長駆進軍してサファヴィー朝の首都イスファハーンを攻略した。その後アフガン人の勢力はイーラーンから後退したが、イーラーンにアフシャル朝を建てて支配権を握り、さらにはインドに遠征してデリーを征服した、ナーディル・シャーフの配下にあったサドーザイ・アフガン族のアフマドが1747年に独立し、史上最初のアフガーニスタン国家が成立した。アフマ

ドはペルシア語で王を意味する「シャーフ shāh」の称号を用い、「真珠の中の真珠」という意味の「ドゥッレ・ドゥッラーン Durr-i Durrān」 と称した。この語に由来する「ドゥッラーニー Durrānī」という語がこの王朝の名である。1818年にバーラクザイ部族のドゥースト・ムハンマドがカーブル Kābul を首都としてアフガーニスタンを再統一し、新たな王朝が始まった。インドを植民地化していたイギリスと、中央アジアに進出したロシアは、それぞれアフガーニスタンを支配下に置こうとし、特にイギリスは1839、1878、1919年の3度アフガーニスタンに出兵したが、いずれも激しい抵抗に遭い、目的は達せられなかった。イギリスは、1880年にはアフガーニスタンを保護国（イギリスが外交権を保持）としたが、1919年の第3次アフガン戦争後、ラーワルピンディー条約によってアフガーニスタンは外交権を回復し、独立した。

### 激動の現代史

1973年7月漸進的な近代化を進めてきた国王ザーヒル・シャーフの外遊中に王の従兄弟、ムハンマド・ダーウドによるクーデタが起こり、国王は亡命した。この後アフガーニスタンは共和国になったが、政情は安定せず、1978年4月にソ連共産党の強い影響下にあった人民民主党による軍事クーデタが起こり、社会主義者が政権を握った。しかし、この政権内部での争いが原因となって、1979年12月には友好善隣条約を結んでいたソ連の軍事介入をバックとして再びクーデタが起こった。その結果人民民主党内のパルチャム Parcham（旗印）派と呼ばれた一派が政権を握った。これに反対する住民はムジャーヒディーン Mujāhidīn（信仰を守る戦いの戦士）としてソ連軍に対する抵抗を開始した。この戦いには、他のイスラーム諸国からも多数の義勇兵が参加した。サウデー・アラビヤ出身のウサーマ・ビン・ラーディン Usāma bin Lādin もそうした義勇兵の一人であった。アメリカはソ連との対抗上、隣国のパーキスタンを通じてムジャーヒディーンを軍事的に援助した。日本を含む西側諸国は、ソ連のアフガーニスタン侵略に反対して1980年のモスクワ・オリンピックをボイコットした。

1989年2月ソ連軍はアフガーニスタンを制圧できないまま撤退し、

この後暫くは首都カーブルを押さえる社会主義的なナジーブッラーフ Najīb Allāh 政権とムジャーヒディーン各派との内戦が続いた。1992年2月カーブルが攻略されてナジーブッラーフ政権は崩壊、ムジャーヒディーン各派が協力した連合政府が樹立された。大統領にはラッバーニー Burhān al-Dīn Rabbānī (タージク系)、首相にはヒクマティヤール Hikmatiyār (パシュトゥーン) が就任した。しかし、この政権の基盤も脆弱で、パシュトゥーン、ウズベク、タージク、ハザーラ各民族の利害も一致しなかった。その結果かつてのムジャーヒディーン各派の間で内戦が始まり、埋設地雷処理も進まないまま、戦争状態が続いた。

内戦の間にモラルの低下から、兵士による女性への暴行事件や略奪、放火といった凶悪な犯罪が頻発した。戦火を逃れて隣国のパーキスタンのマドラサ (イスラーム教についての学問を教え、学ぶ学校) でイスラーム教に関連する勉強をしていたパシュトゥーン人の神学生たち (ターリバーン *Tālibān*) が1994年にこうした現状を憂えて立ち上がり、アメリカが後援するパーキスタン政府からの援助を受けながら、アフガニスタン国内で勢力を増していった。ターリバーンの指導者はカンダハール Qandahār に本拠を置いたムハンマド・ウマル *Muḥammad ‘Umar* である。1996年9月にターリバーンは首都カーブルを制圧し、政権を握ったが、国際社会からは認知されず、国連の議席もターリバーンに反対する、タージク人、ウズベク人、ハザーラ人を主体とする寄り合い所帯の北部同盟の中のラッバーニー派が持っていた。その後ターリバーンはウサーマ・ビン・ラーディンの率いる、激しい反米思想を持った、テロ組織カーイダ *al-Qā‘ida* (アラビア語で「基盤、本拠」の意味) の支援を受けて反対勢力を国内の北東部に追い詰め、全土を制圧する勢いを示した。国内では超保守的な宗教政策を採り、女性の就業、教育を禁止し、TVや映画、音楽等の娯楽の禁止、イスラーム法=シャリーアの厳格な適用に基づく公開処刑など他のイスラーム諸国にも見られない狂信的とも言える国民抑圧体制を敷いた。2001年3月には、国際世論の反対を無視して、ハザーラ人の居住地域であるバミヤーンにあった、世界的な文化遺産である巨大な石仏を爆破し、国際社会から大きな非難を浴びた。

2001年9月11日にアメリカで同時多発テロが起こった後、アメリカはウサーマ・ビン・ラーディンのカーイダ集団がテロを執行したとして、ターリ

バーン政権にウサーマの身柄引き渡しを要求したが、ターリバーン側は証拠がないとして要求を拒否した。10月7日にインド洋に展開した機動部隊を中心とする米英両国軍の空爆が開始された。米軍の圧倒的な物量作戦とハイテク兵器の使用により、ターリバーン政権はほとんど何の抵抗もできないまま、11月13日首都カーブルを放棄、12月7日には本拠地カンダハールを明け渡した。11月の末からは、ドイツのボンで北部同盟と、国外にあった元国王支持派などの亡命政治勢力が参加して代表者会議が開かれ、この会議での決定に従い、12月22日に首都カーブルで、ハーミド・カルザイ Hamid Karzay を議長とする暫定行政機構が発足した。2002年1月21、22日には東京でアフガーニスタン復興支援会議が開催され、カルザイ議長も来日した。この会議の結果、各国から総額で45億米ドル以上の復興支援額が決定された。4月18日には元国王のザーヒル・シャーフが29年ぶりに亡命先のイタリアから帰国し、元国王の招集により、6月11日から19日まで、緊急ローヤ・ジルガ Lōya Jirga (国民大会議) がカーブルで開催された。会議の結果、憲法制定後総選挙を実施するまで、2年間の移行政権の国家元首にカルザイ議長が選出された。

### アフガーニスタンの現状と課題

アフガーニスタンは元来農業と牧畜を主産業とする国家で、1919年の独立以来王制の下で漸進的な近代化が進められていた。首都カーブルには大学も創設され、優秀な人材は日本を含む西側の各国やソ連に留学した。鉄道は計画されたが、全く敷設されず、インフラ整備は道路網の建設を中心に行なわれた。1979年のソ連軍侵攻以来現在まで、各種のレベルでの内戦が絶えず、その結果、元々貧弱であった社会資本がほとんど完全に破壊されてしまった。

ターリバーン政権下では、大量の難民が国外に流出した他に、人材教育のための設備や制度が崩壊したために社会の荒廃は一層激しくなった。また、2001年までの3年間は干ばつが続き、灌漑機能が破壊された農村に決定的な打撃を加えた。国内の主要な道路網は米軍の爆撃によって寸断され、その補修整備と1000万個に上ると推定される埋設地雷の撤去作業、電力や生活

用水の確保、通信設備の復興もインフラ再建にとって緊急の課題である。現在の移行政権の下で、主として日本を含む諸外国からの復興支援が、アフガーニスタン国民の生活再建に直結した形で行われることが求められている。

2001年末から暫定政権、2002年6月からは移行政権が発足し、一応国家としての体裁は整ったものの、首都カーブルを除く地方では、依然として私的な軍事力を保持したままの有力な軍閥の首領たちが影響力を行使している。西部の都市ヘラートには、タージク系のイスマーイール・ハーン、北部の要衝マザリー・シャリーフにはウズベク人のドストゥム將軍というふたりの有力軍人がおり、南部のカンダハールや東部のジャラーラーバードでもパシュトゥーン系の有力軍閥が独自の勢力圏を持ち続けている。このような、あたかもターリバーン政権成立以前に逆戻りしたかのような、軍閥割拠の状況は、アフガーニスタンの政治的な将来に大きな不安の影を投げかけている。パシュトゥーン人のカルザイを首班とし、対ターリバーン軍事作戦で重要な役割を果たした、タージク人主体の北部同盟が中心となった現在の移行政権でも、地方軍閥の武装解除や民族横断的な国軍創設は実現しておらず、何よりもアフガーニスタンの社会全体に、民族や地域の枠組みを超えた「国民意識」の形成と浸透が必要であろう。

### アフガーニスタン周辺諸国の状況

☆パーキスタン：1947年にイギリスの植民地からインドと分離して独立。現在は1999年10月にクーデタを起こした、陸軍参謀長出身のパルヴェーズ・ムシャッラフ Parvēz Musharraf が大統領を務める軍事政権。人口は約1億3000万人で、首都はイスラマバード Islāmābād。北西部にはパターン（パシュトゥーン）人が多く住み、イスラーム教スンナ派の人々が多い。独立以来、インドとの間でカシミール領有をめぐる問題があり、1947、65、71の3度インドと軍事衝突した。現在は、インドに対抗して核兵器とそれを運搬するミサイルを保有している。ソ連軍の侵攻以来、300万人以上のアフガーニスタンからの難民が流入している。

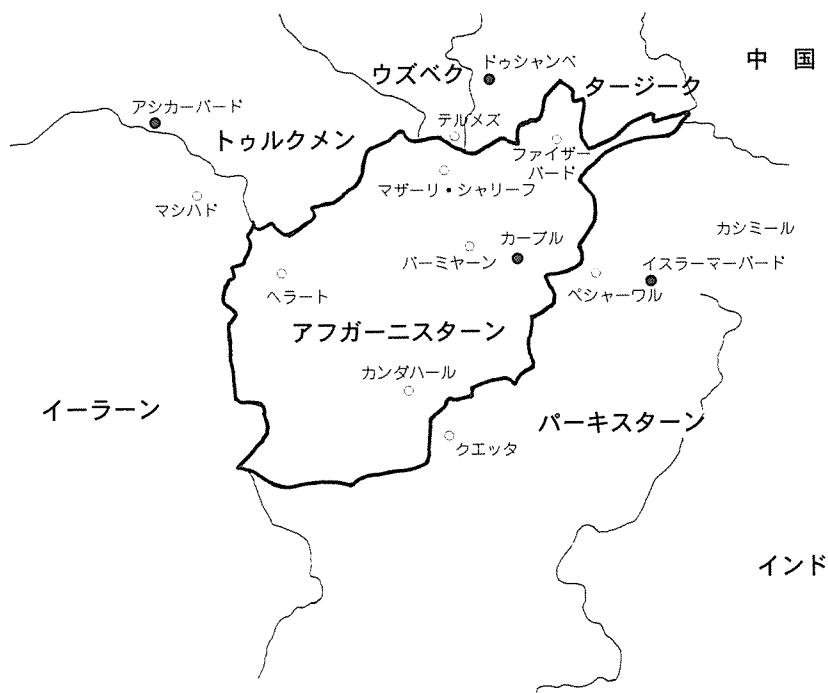


☆イラン：1979年2月のイスラーム革命で共和国となった。12イマーム・シーア派の宗教指導者アーヤトウッラーフ、ホメイニー Āyat Allāh Rūḥ Allāh Khumaynī 師の指導の下で、1980年から88年までアメリカの軍事的な支援を受けたサッダーム・フサイン政権の隣国イラクとの戦争を行なった。ペルシア湾岸には産油地帯があり、石油輸出が国家の主要な収入源を占めている。人口は6000万人を超え、トルコ、エジプトと並ぶ中東の大国。首都はテヘラーン Tehrān。米国とは外交関係断絶中で、米国の経済制裁を受けている。1997年にモハンマド・ハータミー Muḥammad Khātāmī が直接選挙の結果、大統領に就任後急速に民主化が進んでいる。200万人以上のアフガーニスタン難民を受け入れている。

☆トゥルクメニスタン：1991年にソヴィエト連邦から独立。人口約450万人。人口の約80%がトゥルクメン人。首都はアシカーバード Ash-qābād。ソヴィエト時代のトゥルクメン共和国共産党第一書記を務めたサパルムラード・ニヤーズフ Saparmurād Niyāzov 大統領（トゥルクメン・バシュと称している）の独裁体制が続いている。天然ガスの埋蔵量が多く、アメリカを初め、周辺国に関心を持っている。

☆ウズベキスタン：1991年にソヴィエト連邦から独立。中央アジアの中心部を占め、約2500万の人口を有し、その80%がウズベク人。首都はタシケント Tashkent。ソヴィエト時代のウズベク共和国共産党第一書記を務めたイスラーム・カリーモフ Islām Karimov 大統領の事実上の独裁体制。イスラーム教スンナ派の住民が多いが、政権は反体制派のイスラーム勢力を押し込もうとしている。反体制派のイスラーム勢力は東部のファルガーナ Farghāna 地方に多く、その一部はターリバーン勢力に合流し、アフガーニスタンで活動していた。

☆タージキスタン：1991年にソヴィエト連邦から独立後、92～97年の間、国内のイスラーム勢力と政府の間で内戦が続き、ロシア連邦軍が現在のイマーム＝アリー・ラフマーノフ Imām ‘Alī Raḥmānov 大統領（ソヴィエト時代のタージク共和国共産党第一書記）を支援した。人口は約650万人で、



付 図

その約65%がタジク人，25%がウズベク人。首都はドゥシャンベ Dūshanbe。内戦の期間，住民の一部がアフガーニスタンに避難したこともある。

#### 参 考 文 献

『岩波イスラーム辞典』岩波書店，2002。

永田雄三編『西アジア史Ⅱ イラン・トルコ』山川出版社，2002。